

# 食風俗描写史・試論

## 絵巻物に見る食風俗

Eating as Depicted in Pictorial Representations

並木誠士

- ①はじめに
- ②方法論と分類
- ③食風俗描写の諸相
- ④食風俗描写の転換
- ⑤おわりに

### 【論文要旨】

本稿の目的は、まず、「食」の多様な在り方がわが国の絵画、特に絵巻物の中でいかに描かれてきたのかを概観することである。そして、食風俗の絵画化の歴史の中で、室町時代の前半の《慕婦絵詞》と後半の《酒飯論絵巻》とを二つの転換点にある作品として位置付けることが本稿の第二の目的である。

絵巻物においては、詞書に直接記されていないものの、主題・ストーリーを肉付け、また、画面を豊かに膨らませていくものとして食風俗の描写が多く取り入れられている。このように点景が多様になる傾向は、十三世紀末の《一遍聖絵》あたりから見られ、十四世紀になると《春日権現霊験記》《慕婦絵詞》などをはじめとして多くの作例に見られる。このような「絵巻物の饒舌化」ともいえる大きな流れの中で、特に食風俗に関して大きな転換点となる作品が《慕婦絵詞》であり、《酒飯論絵巻》である。

《慕婦絵詞》における食風俗表現の大きな特徴のひとつは、食事の情景とその舞台裏にあたる厨房の情景を均等な眼で扱っている点であり、それをさらに徹底させて画家と同時代の食風俗を積極的に絵画化した作品が《酒飯論絵巻》である。そして、《酒飯論絵巻》の風俗表現の特色であった当世風俗の積極的描出と物事の表と裏とへ均等に向ける眼差しは、室町時代後期から桃山時代にかけての風俗画全盛の傾向に大きく拍車をかけることとなった。つまり、食風俗描写の流れにおいて、先行作品からの飛躍という点で《慕婦絵詞》を第一の転換点とし、それをさらに徹底させて後続作品へ大きな影響を与えたという点で《酒飯論絵巻》を第二の転換点とすることができるのである。

そして、このような近世の風俗画の先駆をなす点景風俗の充実が、食風俗の描写を契機としていたという点に、「食」が人間の生活にとって欠くことのできない営みであり、関心の対象であったことが伺えるのである。